
歴史のなかの中央アジア

ゼンギーアタからの眺望

小松 久男

Komatsu Hisao

はじめに

ロシアの東洋学者バルトリド（1869—1930年）は、『トルキスタン文化史』（レニングラード、1927年）の冒頭で次のように書いている。

「ロシアに併合された他のイスラーム地域、とりわけヴォルガ・ウラル地方や西シベリアと異なり、中央アジアにおいてロシアに組み込まれたのは、ロシア人がキリスト教を受け入れるよりもずっと前に、イスラーム文化が高度に発達し、しかも住民がイスラームを受容する前から連綿たる文化を育てていた地域であった」（バルトリド 2011、17ページ）。

中央アジアを後進的な地域とみなす空気が強かった時代にあって、この一節は彼の見識の高さを示していたと言えるだろう。碩学が指摘するとおり、中央アジアの歴史と文化は奥行きが深く、かつ動態に満ちている。小文では、中央アジアの歴史と文化を通観する手がかりとして、ウズベキスタンの首都タシュケント近郊のマザール（聖廟）、ゼンギーアタ廟に注目してみたい。ここに眠る13世紀の聖者ゼンギーアタ（1258年没）は、古くからタシュケントの守護聖者としてのみならず、偉大な聖者として中央アジア一円で崇敬を受け、今も日に5000人と言われるほど、参詣者が絶えることはない。これに注目すると、現在に至る中央アジア史のさまざまな時代の相を読み取ることができるからである。

1 中央アジアのイスラーム化

ゼンギーアタは、中央アジアのイスラーム化と深く結びついている。この地にイスラームをもたらしたのは、7世紀末以来イラン方面から北上して南部のオアシス地域に侵攻したアラブ人であった。この新しく活力にあふれた宗教は、オアシスの民が信仰していたゾロアスター教や仏教、キリスト教あるいはトルコ系遊牧民のシャーマニズム信仰に取って代わっていった。もっとも、これらイスラーム以前の信仰の伝統は時にイスラームの衣装をまとうて生き残り、今も人々が現世利益の願をかけたに訪れる参詣地にその痕跡をとどめていることがある。実際、ゼンギーアタ廟の境内には彼の妻アンバル・アナ（別称ビビ）の廟があるが、そのイメージは古代のゾロアスター教の女神アナーヒタや古代トルコ人の女神（大地母神）ウマイの表象を伝えているという説もある（Abashin 2006, p. 152）。イスラームは、まず南部のオアシス地域に根をおろし、そこから草原や高原の遊牧民の間に広まっていった。

このトルコ系遊牧民のイスラーム化に大きく貢献したことで知られているのが、12世紀の聖者アフマド・ヤサヴィー（1166/67年没）である。現在のカザフスタン南部、すなわち草原とオアシスとが交わる境界地域に生まれ育ったヤサヴィーは、アラビア語もペルシア語も知らない遊牧トルコ人に、彼らの母語トルコ語を用いてイスラームの教義を語り伝えた。彼の教えは覚えやすい韻文で表現され、やがて彼に帰される詩集『英知集』が成立するが、それは現代に至るまで読みつがれている。

さて、ゼンギーアタは、ヤサヴィーの師にあたる人物の末裔であるとともに、ヤサヴィーの教えを継いだハキームアタに師事したという。つまり彼は二重の意味でヤサヴィーと結びついているのである。ただし、幾重もの伝説におおわれて、彼の実像はなかなかみえない。本名はアイホージャとも言われるが、肌が黒かったことからゼンギーアタ、すなわち「黒き師父」と呼ばれてきた。血筋については、預言者ムハンマドの娘婿で第4代カリフのアリーに連なるという伝承もあるが、これも確証はない。彼は、日々家畜を追う牧童の仕事で生計をたてながら、神への没入という神秘体験とイスラームの学識に恵まれ、多くの弟子を集めたという。伝承によると、ゼンギーアタがひたすらアッラーの名を唱えつつ忘我の境地に入っていくと、その周りには自然と家畜が集まってきたという。やがて彼は牧童の守護者（ピール）ともされた。

彼の時代は、中央アジアのオアシス諸都市がチンギス・ハンのモンゴル軍に蹂躪された、まさに激動期にあっていた。ゼンギーアタの没年は、モンゴル軍が西進してバグダードを攻略し、アッバース朝のカリフを殺害した年にあたる。しかし、ゼンギーアタの高弟たちは師の指示に従って、今のウクライナからカザフスタンに広がるキプチャク草原に分け入り、トルコ・モンゴル系の遊牧民の間にイスラームを広めることに努めた。聖者伝によれば、14世紀前半キプチャク草原に君臨したチンギス裔のウズベク・ハン（1342年没）をイスラームに改宗させたのは彼らであったという（DeWeese 1994）。ウズベク・ハンに従っていた遊牧集団は、その名にちなんでウズベクと呼ばれるようになり、15世紀末には分裂して弱体化したティムール朝に代わって中央アジア南部のオアシス地域を支配することになる。彼らはすでにムスリム（イスラーム教徒）となって久しいが、チンギス・ハンの血統に連なる者のみが君主となれるという草原の掟を復活させた。ゼンギーアタとその一門は、このような歴史の転変に関与していたのである。彼らは定住民と遊牧民の双方に多数の信徒をもつヤサヴィー教団の発展にも大きく貢献した。

ここでゼンギーアタ廟に話を移すと、それはいささか奇妙なことながら、中央アジアの覇者ティムールの治世（1370—1405年）にこの聖者の墓が「発見」され、ティムールがこれを護るために墓廟を建設したことが始まりである。伝承によれば、ゼンギーアタは、ティムールの出現と世界征服を予言し（Sela 2011, p. 73）、この聖者のために、ティムールはサマルカンドで焼いたレンガをここまで運ばせたと伝えられる。墓廟の建設は新しい王朝の威勢とともに、イスラームの保護者としての自らの姿勢を示すためだったのだろう。彼はこれに前後して、シル川中流域のヤスの町に壮大なヤサヴィー廟を建設している。ヤサヴィーとゼンギーアタは、ここでも一対である。ティムールはどちらを先に建立すべきか、夢のお告げに従

ったという。ティムールの孫で首都のサマルカンドに天文台を建設したことでも名高いウルグベク（1394—1449年）は、ゼンギーアタ廟に壮麗な正面玄関を寄進した。

ティムール朝期にナクシュバンディー教団の指導者として中央アジアの政治と経済に影響力をふるったホージャ・アフラル（1404—90年）は、「いつゼンギーアタの廟を訪れようと、いつも墓からは『アッラー、アッラー』の声が聞こえる」と記している。ティムール朝以来、この廟は聖者による神へのとりなしを期待して、戦勝から息災までさまざまな願いを胸にした人々の参詣する場となり、ちょうど門前市のようなかたちで集落が営まれた。17世紀以降、ヤサヴィー教団はナクシュバンディー教団の勢力におされて衰えたが、ゼンギーアタへの崇敬がやむことはなく、同じころマドラサ（高等学院）とモスクが併設され、廟を中心とする複合体が形成された。廟の裏手には、聖者の傍らに眠ることを求めた人々の墓が広がっていった。

18世紀の前半、中央アジアの安定はウズベク諸部族間の抗争に加え、モンゴル系の遊牧集団ジュンガルやイランのナーディル・シャー（1688—1747年）など、外敵の侵攻によって失われた。ジュンガル支配期にタシュケント一円も荒廃したことが知られている。しかし18世紀後半に入ると、中央アジアの国際商業にはロシア領内のトルコ系ムスリム（タタール人）やインド人の商人も参入して活気を取り戻すようになった。トルコ系遊牧民カザフのアブライ・ハン（1781年没）がジュンガルを討伐した清朝とロシアという東西の大国に二重の朝貢を行なって、遊牧カザフの独立を巧みに確保していたころ（彼も慣行に従って死後ヤサヴィー廟に埋葬された）、南部のオアシス地域では個々のウズベク部族がブハラ、ヒヴァ、コーカンドを中心に新たな政権を樹立し、灌漑事業による農業開発やロシア・清朝との通商によって経済的な発展を目指していた。このウズベク君主たちは、もはやチンギス家の血統に頼ることなく、むしろ敬虔なムスリム君主を標榜することによって支配の正当化をはかり、スンナ派イスラーム世界の盟主、オスマン帝国のスルタン＝カリフに使者を送って忠誠の意を表明した。しかし、いずれの政権もロシアの脅威が目前に迫るまで、近代世界の変化をとらえて、これに適応することができなかった。

2 ロシア帝国のなかで

1865年のはじめ、カザフ草原を越えて南部のオアシス地域に侵攻したロシア軍は、タシュケントの攻略を目前にしていた。それは大局的にみれば、英露2つの帝国がユーラシア大陸を舞台に展開していた「グレートゲーム」の重大な局面であった。このままロシア軍が南下を進めれば、イギリス領インドは北からのロシアの脅威にさらされることになるからである。しかし、ロシア軍の侵攻という事態を最も憂慮していたのは、もちろん現地のムスリム住民であった。中央アジア最大の商業都市タシュケントを失えば、コーカンド・ハン国の命運はつきる。

このとき対ロシア戦を指揮していたのは、コーカンド・ハン国の軍司令官アーリムクル（1833—65年）であり、彼にはターイブ（1830—1905年）という有能な部下（儀典官）がいた。ターイブは、この危機にあたって司令官から密命を与えられた。それはすでにチムケント

(シムケント)を占領したロシア軍司令官チェルニャエフ(1828—98年)と交渉して和平条約を結ぶことであった。苦勞の末に見事交渉をまとめたターイブは、神への感謝を捧げるべく、ゼンギーアタ廟に参籠し、夜を徹してコーランの全章を詠みとおしたという。彼の心は安堵と感謝の念で満たされていたことだろう。これもタシュケントを守護する聖者の恩恵と考えたかもしれない。しかし、まもなく彼は司令官の変心を知ることになる。アーリムクルは、彼にこう語ったという。

『「こたびの和平ははなはだよろしく、これにまさる和平はあるまい、しかし、一点受け入れがたいことがある』。なにゆえにと尋ねると曰く、『この和平はもちろん神の僕たる民に益し、国の安寧、宗教と信徒のためになろう。しかし、トルキスタンとフェルガナの衆はひどく無知蒙昧にして、利害の別もわきまえぬ好戦的で野蛮な輩である。この和平を結べば、無知な衆は言うだろう。総司令官と儀典官の呪うべき二人がおのれの安全と安樂を望み、これほど〔多く〕のムスリムをロシア人の手にゆだね、和平を結んだ。もし彼らが尽力していれば、我らはみな聖戦に立ち、こなたではオレンブルグを、かなたではセミパラチンスクまでも征したことだろう、と。我らの死後も我らの臆病を未来永劫ののしるにちがいない。戦いとなっても死ぬのは私だけだ。民は救われ、呪いの必要もあるまい。もう和平のことを口にしてはならぬ』と」(Beisembiev 2003, pp. 73–74)。

こうしてターイブの努力は水泡に帰した。タシュケントの防衛に勇戦したアーリムクルが陣没すると、コーカンド軍は退却し、1865年6月タシュケントはロシアの軍門に降った。ロシア軍はその後も作戦行動を展開して征服を進め、新しく広大な植民地トルキスタンを統治するために、1867年タシュケントに陸軍省が管轄する総督府を設置する。日本史で言えば、ちょうど大政奉還の年にあたる。こうして中央アジアは、ロシアという異教徒の帝国のなかで、日本とはまったく異なるかたちで近代を迎えることになった。総督府は治安と徴税を優先し、イスラームに対しては干渉を控えた。初代総督カウフマン(1818—82年)によれば、いたずらな干渉はムスリムの反発を招くだけであり、進んだロシア文明のもとでイスラームは弱体化するはずであった。

一方、ロシアの圧倒的な軍事力を前にムスリム君主の「聖戦」が惨めな敗北を喫したことを目撃したムスリム指導者たちは、たとえ異教徒であっても、その公正な統治はムスリム君主の暴政にまさるといふ論理でロシア統治を受け入れた。彼らハナフィー法学派の理解に従えば、イスラーム法の施行が許容され、ムスリムの郷長が地方行政の末端を担っている以上、トルキスタンはムスリムが平和に生活することのできる「平安の家」なのであった。こうした論理は、ロシア側の不干渉政策に期せずして適合していたと言える。

たしかに、ムスリムはロシア統治にすみやかに順応したかのようであった。1873年9月ゼンギーアタ廟の大祭を見学したアメリカの外交官スカイラー(1840—90年)は、興味深い観察記を残している。彼は、タシュケント中の男という男が参集して、ダービー競馬のときでもなければみたこともないほどの人混みに面喰らうが、マドラサ内に設けられた応接の場で持参した赤ワインのボトルを取り出しても、(イスラームでは一般的に飲酒が禁じられているが)だれも驚く様子を見せなかったという。そして、ロシアの高官たちのために用意されたステ

ージでは、大勢の楽士が奏でる地元の曲にのって少年たちが踊りを披露し、その幕間にはロシアの軍楽隊がオッフェンバックの喜歌劇『大公妃殿下』（1867年作曲）からの抜粋を演奏していたのである（Schuyler 1877-I, p. 138）。

ロシア統治に関するスカイラーのコメントも興味深い。彼は、資源に乏しいトルキスタンの経営はロシアの国庫に大きな負担をかけるばかりであり、現地のロシア行政は不正にまみれ、機能不全に陥っていることを指摘しながらも、かつてのムスリムのハンやアミールの専制的な統治に比べれば、ロシアの統治は現地住民を利するところがあり、ロシアは多額の出費にもかかわらず、その威信にかけてトルキスタンを統治していくだろうと記す。彼は、「ムスリムの信仰や慣行について何一つ制約」を課さなかったロシアのイスラーム政策は「最高の賛辞に値する」とすら評している（Schuyler 1877-II, p. 235）。

スカイラーが目にしたゼンギーアタ廟は、歴史の風雪を経て相当に傷みがひどく、みすばらしい姿を呈しており、参詣者が境内の木々に結んだ数え切れないほどの「汚い」小布やあちこちに置かれた羊の角は、あまりよい印象を与えなかったようである。実際、1869年の地震で聖廟のドームにも大きな被害が出ていたことが知られている（Saidov 2015, p. 231）。1888年のこと、ゼンギーアタ廟は、他の歴史的建造物とともに、皇帝アレクサンドル3世（在位1881—94年）の下賜金によって修築された。この慶事を受けて、時のトルキスタン総督は、記念式典でムスリムの参会者に「慈愛あふれるツァーリ〔ロシア皇帝〕への感謝の祈りを捧げさせることに成功した。これに気をよくした総督は、この「有益な」経験をタシュケント市内の全モスクに普及させるように命じたが、これに従うイマーム（礼拝の導師）はいなかった。トルキスタンの内地化をはかった総督に対して、ムスリム指導者は暗黙の拒否によって「平安の家」の自立性を守ろうとしたと言えるだろう。

19世紀の末にゼンギーアタ廟の境内にミナレット（モスクに付属する高塔）が建てられるが、その壁面には特徴のある刻文と迷路が刻まれていた。刻文は、アラビア文字を巧みに組み合わせたもので、アッラーに続いて預言者ムハンマド、そして彼を継いだアブーバクル以下4人の正統カリフの名前を連ねている。これは、後世のムスリムたちが、理想とすべき真のイスラームが実践された父祖の時代を想起するとき必ず登場する、イスラームの第1世代の人々を象徴している。その下には方形の迷路が刻まれているが、その中心には「コスタンティニーヤ」、すなわちオスマン帝国の首都イスタンブルという地名が見える。これはイスラーム世界の盟主たるオスマン帝国のスルタン＝カリフが座した都にほかならない。おそらく、タシュケント出身の刻文の奉納者は、中央アジアのムスリムはカリフの座から遠く離れ、そこへの道は遠く険しいとはいえ、心はカリフと結ばれているということを表示しようとしたのだろう。ロシア当局からすれば、トルキスタンのムスリムがオスマン帝国のスルタン＝カリフに忠誠を表明することは、ロシア帝国の一体性を破壊する汎イスラーム主義であり、じっさい治安機関の報告書にはこれを警戒する記述が頻出していたが、ゼンギーアタの迷路はこうした監視をくぐりぬけていたことがわかる。

3 ソ連時代のイスラーム

1917年のロシア革命後、激しい内戦を勝ち抜いたソヴィエト政権は、1920年代から、中央アジアの政治と経済、社会、文化のすべての領域で、社会主義建設に向けた大改造に着手した。現代中央アジア諸国の原型が作られたのも、1924年の民族・共和国境界画定のときである。このときタシュケントはカザフ・ウズベク間の係争地となったが、ウズベキスタンへの帰属が決定された（熊倉 2012、48ページ）。イスラームについてみれば、1920年代末以降これを社会と文化から一掃し、代わりに無神論教育を導入する政策が強化された。ソヴィエト政権は、イスラームをイデオロギー上のライヴァルとみなしたばかりではなく、その制度や慣行を中央アジア社会の後進性の要因、社会主義建設の障害と考えたのである。ソヴィエト政権は、かつてのエリートであったイスラーム「聖職者」を階級の敵として撲滅し、共産党の指令やキャンペーン、学校教育、マスメディアなどあらゆる手段を用いてイスラーム的な遺制の除去に努めた。こうしたなかで歴史的なゼンギーアタ廟も1930年に閉鎖された。

しかし、1941年6月のナチス・ドイツの侵攻に始まる大祖国戦争（ソ連にとっての第2次世界大戦）は、中央アジアのイスラームに変化をもたらした。開戦直後の最初の金曜日、タシュケントやフェルガナ地方のムスリムは閉鎖されていたモスクに参集した。彼らは露天で「君主の健勝と勝利」を祈願し、続いて「敵の頭に死が降る」ことを神に祈ったという。人々は古くから伝わる慣行を忘れてはいなかったのである。この君主とはスターリンにほかならない。敬虔な信徒の祈願がどれほどの効果をもったのかは不明だが、政権はイスラームに対する抑圧政策を改めて、いくつかの妥協を行なった。総力戦に入ったソヴィエト政権にとって、中央アジアのムスリム諸民族の動員と協力は不可欠だったからである。ソヴィエト政権は1943年11月タシュケントに中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局（以下、ムスリム宗務局と略）の創設を認可する。帝政ロシア時代のトルキスタンにもなかったムスリムの統括組織がこの時期に創設されたのには、国際的な要因もあった。スターリンは連合国首脳とのテヘラン会議を控えており、ソ連において信教の自由は守られていることを示す、少なくとも宗教に手加減を加える必要があったからである。このころ、ムスリムの間に広まった伝説がある。大戦の前夜、謎の男ヒドルがスターリンの夢枕に立ってこう語ったという。「汝はまもなく強敵と戦わねばならなくなる。モスクを1つでも再開させたら、敵に勝たせてやろうぞ」と。そこで、スターリンは部下たちとの長い口論の末に、1つならず何百ものモスクを再開させた（Rossia 2010, pp. 192–193）。

このムスリム宗務局は、再開されたモスクやマドラサ（最初はブハラのミーリ・アラブのみ）、マザールを管理下に置くとともに（1952年には中央アジアで150のモスクとマザールが公認されていた）、聖地メッカ・メディナへの巡礼の再開も請願して認められている（Arapov 2011, pp. 41, 110–111）。1945年1月、人民委員会議長モロトフがムスリム宗務局の請願を受けて移管を許可したブハラのナクシュバンド廟やサマルカンドのシャーヒジンダなど、ウズベキスタン国内の7つのマザールのなかにゼンギーアタの名前はない（Arapov 2011, pp. 36–39）。しかし、ゼンギーアタ廟は、1945年に再開された。ムスリム宗務局はモロトフの裁可を機会に

数百のマザールを再開したようであり、ゼンギーアタ廟もそのひとつだったのだろう。当時、家族や友人の前線からの無事な帰還を祈願するために多くの人々がマザールへの参詣を行っていたとすれば、ムスリム宗務局としても、このような措置をとらざるをえなかったのだろう (Ro'i 2000, pp. 366, 370–371)。しかし、理由は不明だが、ゼンギーアタ廟は翌年ふたたび閉鎖され、無神論博物館、その後は盲人用の寄宿舎や種々の作業場としても使用された (Saidov 2015, pp. 7–9)。ソヴィエト当局からすれば、中央アジア最大の都市タシュケント近郊の廟にあまりにも多数の参詣者が訪れることは、とうてい容認できなかった可能性は十分に考えられる。

ソ連閣僚会議付属宗教信仰問題協議会の管理下にあるムスリム宗務局の判断も、政権の意向に応じて変化した。たとえば、当初はマザール参詣を容認していた (参詣者の喜捨はムスリム宗務局の主要な財源ともなっていた) が、1957年夏から宗教信仰問題協議会が、マザール参詣の大衆的な復活を「宗教復興の危険な兆候」とみなし、参詣の対象となるマザールの閉鎖を検討すると、これを受けてムスリム宗務局も、参詣をイスラーム法に照らして非合法とするファトワ (法的な判断) を信者に向けて発するようになった。こうして、1950年代から1960年代にかけて、マザールでの祈禱や飲食、聖者の霊への願掛け、病気治癒の呪文の禁止など、一連のファトワが出されることになった (Rossiia 2010, pp. 196–198)。その一方で、ムスリム宗務局は、冷戦期の国際関係に対応して、ソ連邦とアジア・アフリカ諸国との善隣友好を強化する政策にも関与した。それは、ソ連におけるイスラーム信仰の自由を謳うとともに、とりわけ中央アジアにおける社会主義建設の成果をイスラーム諸国に披露することに貢献したのである。

しかし、ムスリム宗務局だけがイスラームを代表していたわけではなかった。革命後、ブハラなどイスラーム教学の中心都市を追われた学識者 (ムッラー) たちは、地方のコルホーズなどに身を寄せ、非合法の学塾を開いて後進を指導していた。彼らは、しばしばムスリム宗務局の管理下に入ることなく、独自にハナフィー法学派イスラームの伝統を伝えていたのである。こうしたなか、1970年代半ばからウズベキスタン東部のフェルガナ地方で、若いイスラーム学徒たちの間に覚醒の動きが生まれた。彼らは、敬虔であろうとすればするほど疎外されていくソヴィエト社会の現実に反発し、自分たちの社会がイスラーム的ではないことに危機感を募らせていた。彼らは体制の掲げる科学的無神論のみならず、ムスリム宗務局の体制順応的な姿勢や、儀礼と慣行の実践だけで満足したかのようなイスラームの現状にも批判の目を向けていた。

彼らは預言者ムハンマドの言行が信徒の共同体に正しい規範を与えていたとされる、初期の「清浄な」イスラームへの回帰を主張した。それは、1970年代からイスラーム世界に広がった復興主義の潮流、すなわちサラフィー主義と軌を一にしていた。彼らは中央アジアの伝統的なハナフィー法学派の教義にも異を唱え、自らを革新派と自称した。彼らは中東やパキスタンで刊行されていた復興主義の文献をひそかに入手していたが、彼らの運動に大きなインパクトを与えたのは、1979年のイラン・イスラーム革命とアフガニスタンでのソ連軍に対するムジャーヒディーン (聖戦士) のジハードであった。革新派が革命とジハードに鼓舞さ

れて台頭すると、彼らと伝統的なハナフィー派の学識者やムスリム宗務局との対立は深まるばかりであった。イスラームに対する抑圧が公式に解かれたペレストロイカ期に入ると、両者の対立は民衆をも巻き込むことになった。伝統的なハナフィー派は、彼らが邪教とみなすアラビア半島のワッハーブ派になぞらえて、革新派を「ワッハービー」と呼び、対して革新派はハナフィー派を「多神教徒」すなわち非ムスリムとさえ呼んだのである（小松 2014、74-81ページ）。

ペレストロイカ期に頭角を現わした革新派の指導者アブドゥワリ・カリは、1992年初めのある金曜礼拝の時に次のような説教を行なったという。

「わが同胞、兄弟、姉妹のなかには、慣習と慣行に身をゆだね、聖者廟を訪れては死せる聖者たちに悩みをうちあげ、犠牲を捧げては祈願する者たちがいる。……彼らはトイの席では許されざる、いとうべき行為を冒している。……このような同胞からは、イスラームの政治的な地位を取り戻すための行動など、とても期待することはできない。……われわれが期待するのは諸君、すなわちいとうべき禁忌、慣習と慣行に毒されていない君たち若者なのだ」（Babadjanov 2004, pp. 55）。

このように、アブドゥワリ・カリは、ゼンギーアタのような聖者廟への参詣を厳しく批判しているが、彼のこうした批判はカセット・テープを通して流布していたことが知られている。たとえば、ある講話のなかで彼はイスラームが否定する多神教をテーマにしているが、「現代のイスラーム世界における多神教のタイプのひとつは、神以外のものに祈りを捧げることだ」と指摘している。彼によれば、墓をモスクにすることや墓に願をかけること、神以外のものに奉納を行なうこと、墓に犠牲を捧げるとは、すべからく多神教の行ないであり、聖地の巡回はメッカのカーバ神殿においてのみ許され、巡礼もまたメッカの聖モスクとメデイナの預言者モスク、そしてイエルサレムのアクサーモスクに限られるのであった（Frank & Mamatov 2006, pp. 77-79）。このように革新派は、マザール参詣を許容してきた伝統的なイスラームに挑戦したが、幅広い支持を受けることはなかった。

1946年以来、聖廟としては閉鎖されていたゼンギーアタ廟が再開されたのは1989年のことである。それは、まさにイスラームの復興、イスラームへの回帰が急速に進むとともに、あるべきイスラームをめぐる議論が白熱し、再開あるいは創建されたモスクやマドラサの管理権をめぐる対立すら生じる時期にあたっていた。それからまもなく、イスラーム国家を目指した革新派は政権の弾圧を受け、逮捕を免れたグループは国外に去った。彼らは内戦下の隣国タジキスタンを経てアフガニスタンに入り、やがてターリバーンやアルカーイダと手を結んで武装組織「ウズベキスタン・イスラーム運動（IMU）」を結成することになる。これに対して、マザールへの参詣者は明らかに増えていった。今でもマザールの傍らには墓への接吻や跪き、聖者への請願などを禁じる看板が見えるが、こうした規則は必ずしも守られてはいないようである（Abramson & Karimov 2007, pp. 326-327）。

おわりに

ソ連からの独立以降、ゼンギーアタ廟では大規模な改修が行なわれてきた。特に2014年に

は、廟の前の中庭を構成してきた門や建物、さらに先述の特徴ある迷路が刻まれたミナレットは撤去され、廟は広大な前庭をみわたすように正面をあらわにしている。モスクの脇には新たなミナレットが建てられた。現在のゼンギーアタ廟は、ウズベキスタンのカリモフ政権とウズベキスタン・ムスリム宗務局の支援と保護、そして絶えることのない参詣者の支持を得て、中央アジアのイスラームの伝統を誇示しているかのようにみえる。

ソ連の末期から始まったイスラーム復興は、イスラームが人々の意識や生活に回帰する流れを生み出すとともに、革新派の系譜に連なるIMUのような過激派の出現やグローバルなイスラーム解放党などの情報宣伝・組織活動をもたらした。ほとんどの人々はイスラームの政治化を望まず、外から持ち込まれる過激な、あるいは厳格なイスラームへの違和感を共有しているが、イスラームの理解は世代によって、また人によって多様化しているようにみえる。イスラームへの回帰は、ソ連時代を経験した世代よりも、若い世代により強く感じられるときがある。

その一方で中央アジアを取り巻く環境は厳しく、予断を許さない。南接するアフガニスタン北部では、ターリバーンとISIL（いわゆる「イスラーム国」）が、相互に対抗しながら支配拠点を拡大しつつあり、対テロ戦争で大きな打撃を受けたIMUが勢力を回復する可能性もある。さらに、ISILの脅威は中央アジアでも現実のものとなっている。今年5月にはタジキスタン内務省軍の司令官が部下とともにISILに加わるという衝撃的な事件が起こった。

ISILによる青年の勧誘も深刻な問題であり（ISILに加わった中央アジア出身者は数千人規模と推定されている）、ウズベキスタンでは今年『ISILの扇動（フィットナ）』と題する冊子が刊行されている（Tulepov 2015）。フィットナとは、ハナフィー法学派が最も嫌悪する、秩序を破壊する行為のことであり、冊子はカラー写真を多用しながらISILの暴虐を描くとともに、海外留学やロシアへの出稼ぎの間にジハードへの勧誘を受け、その後真相を知って悔悟した男女の実例や推奨されるインターネット・アドレスを紹介し、国内のモスクのイマームに指導力の発揮を呼びかけている。ウズベキスタン・ムスリム宗務局長を責任編者に迎えたこの冊子は、ISILの主張や行動を論難するコーランの章句や預言者のハディースをいくつも引用しているが、章句の一つは次のように言う。「アッラー曰くと称していいかげんなでたらめを言い、何も知りもしないくせに人々を迷わそうとかかる、それほど性の悪い者はない。まことにアッラーは、不義の徒など絶対に導いては下さらぬ」（コーラン6章144節、訳は井筒俊彦訳、岩波文庫版によった。Tulepov 2015, p. 85）。ウズベク語版3万部、ロシア語版1万部という破格の出版部数は、脅威の深刻さを物語っている。

イラクとシリアに生まれた強力な磁場が中央アジアをも引きつける現代、幾多の転変をみしてきたゼンギーアタ廟は、これからはたして何をみることになるのだろうか。中央アジア諸国の国内事情も視野に収めながら、注視していく必要があるだろう。

■参考文献

- 熊倉潤（2012）「民族自決の帝国——ソ連中央アジアの成立と展開」『国家学会雑誌』125巻1・2号、41-104ページ。
- 小松久男（2014）『激動の中のイスラーム——中央アジア近現代史』、山川出版社。

- V・V・バルトリド (2011) 『トルキスタン文化史 (1)』 (小松久男監訳)、平凡社東洋文庫。
- Abashin, S. N. (2006) “Zangi-ata,” *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii: Entsiklopedicheskii slovar'*, Tom I, Moskva: Vostochnaia literatura, pp. 150–153.
- Abramson, David M., and Elyor E. Karimov (2007) “Sacred Sites, Profane Ideologies: Religious Pilgrimage and the Uzbek State,” in Jeff Sahadeo and Russel Zanca eds., *Everyday Life in Central Asia: Past and Present*, Bloomington: Indiana University Press.
- Arapov, D. Iu. (2011) *Islam i sovetskoe gosudarstvo (1944–1990)*, Sbornik dokumentov, Vypusk 3, Sostavitel', avtor predisloviia i primechanii D.Iu. Arapov, Moskva: Izdatel'skii dom Mardzhani.
- Babadjanov, Bakhtiyar (2004) “Debates over Islam in Contemporary Uzbekistan: A View from Within,” in Stéphane A. Dudoignon ed., *Devout Societies vs. Impious States? Transmitting Islamic Learning in Russia, Central Asia and China, through the Twentieth Century*, Berlin: Klaus Schwarz Verlag.
- Beisembiev, Timur K. (2003) *The Life of 'Alimqul: A Native Chronicle of Nineteenth Century Central Asia*, Mulla Muhammad Yunus Djan Shighavul Dadkhah Tashkandi, edited and translated by Timur K. Beisembiev, London-New York: RoutledgeCurzon.
- DeWeese, Devin (1994) *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tiikles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press.
- Frank, Allen, and Jahangir Mamatov (2006) *Uzbek Islamic Debates: Texts, Translations, and Commentary*, Springfield: Dunwoody Press.
- Ro'i, Yaacov (2000) *Islam in the Soviet Union: From World War II to Perestroika*, New York: Columbia University Press.
- Rossiiia (2010) *Rossiiia-Sredniaia Aziiia*, Tom 2, *Politika i islam v XX-nachale XXI vv.*, Kollektiv avtorov, Moskva: URSS.
- Saidov, Akmal (2015) *Hazrat Zangi ota*, Toshkent: Sharq.
- Schuyler, Eugene (1877) *Turkistan: Notes of a Journey in Russian Turkistan, Kokand, Bukhara, and Kuldja*, 2 vols, New York.
- Sela, Ron (2011) *The Legendary Biographies of Tamerlane: Islam and Heroic Apocrypha in Central Asia*, New York: Cambridge University Press.
- Tulepov, Aydarbek (2015) *IShID Fitnasi*, Toshkent: Movarounnahr.